

第 14 章 コミュニティ・アートによる振興策と若者呼び込み策

～コミュニティ・ツーリズムとも組み合わせ～

ありむら潜

1. はじめに

(1) タイトルはコミュニティ・アートとしたが、ここでは中身的にはもっと広義の「表現活動」も含む話である。ここはアートとは何かについて一般論的に語る場ではない。とりあえず、「西成区（あるいは新世界地域など浪速区の一部も含めたいわゆる大阪ディープ・サウス地域）でまちづくりに資する、人々の生活に根ざした表現活動全般」のこととする。

(2) 一方では、新世界界限（浪速区）からあいりん地域や西成区にかけては従来から人間の葛藤が渦巻く街だけに、さまざまなジャンルの一流のアートや芸能が輩出されてきた地域である。本格的なアートの展開は今後も大いに期待される。実際、そうしたアーティストも入っている。それもまた、ここで言うまちづくりの不可欠なプレイヤーである。社会的矛盾や人々のエネルギーや葛藤があふれる地域だけに、ここは「学びと創作表現活動の泉」である。考え方によってはそれ自体、地域資源だと見なせる。

(3) 少々乱暴であるが、コミュニティ・アートとコミュニティ・ツーリズムをここではいっしょに取り扱う。

なぜか。地域社会に対する役立ち方がほぼ重なるからだ。少なくとも西成区やあいりん地域というフィールドにおいては、両者は実態的に内部で一体化している。ということは、まちづくりアクションという実践の場ではワンセットで考えるほうが自然である。ゆえに、最後の結論の箇所で、ワンセットでの提案をする。

(4) このテーマは第 10 回西成特区構想有識者座談会でとりあげられ、上田假奈代、雨森信、松村嘉久、水内俊雄の各氏から発言や提案がなされた。ふり返ってみると、そこには多くの共通点が見られる。これはそのまとめの報告とすると同時に、筆者自身のこの方面に関する 2 つの経験（漫画「カマヤん」シリーズを描き続けてきた経験、釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを実施してきた経験）も加えて、このテーマに向き合っていきたい。

2. コミュニティ・アートの実践から考える

(1) それぞれの実践

○上田假奈代さん（詩人）は NP0 法人こえとことばとこころの部屋（通称ココルーム）を主宰し、あいりん地域で現在 4 つのコミュニティ・アート拠点を運営している。「インフォショップ・カフェ ココルーム」「カマン！メディアセンター」「えんがわ茶屋こころぎ」「ニカイ！文化センター」。「こころぎ」以外は古い木造住宅を活用したものだ。

対象者：生活保護や年金受給者の紙芝居劇団「むすび」、地域の日雇い労働者、生活保護受給者、ホームレスの人々、子ども、若者、学生、ニート、支援者、社会人、生きづらさを抱える人たちなど。

その活動内容：毎日「場」を開き、ワークショップ、小さな発表会、トークイベント、句会、手芸、ささやかな表現の機会をつくりつづける。アウトリーチ活動も積極的に行ない、地域のなかへ、さまざまな地域へ出前に行く。ときには、公演というかたちやシンポジウムなどを開催し、発表の機会、ふりかえり、課題を整理する機会をもうける。

○雨森信さん（大阪市立大学都市研究プラザ特任講師）は、大阪市の文化事業として 2003 年からスタートした地域密着型アートプロジェクト「Breaker Project」に参画し、西成区山王にある「新・福寿荘」という古い木造の共同住宅を活用した地域密着型アートの創造活動拠点の運営に携わっている。その他に、山王界隈をフィールドに、街の風景へのアート、福祉施設でのアートによるワークショップ、地域コーディネーターの発掘等々を住民の参加型で実践している。

○ありむら潜は、当地の日雇い労働者を主人公とした漫画『カマやん』シリーズを描くことを通して、35 年間にわたり、あいりん地域の人々の葛藤や街の変遷を発信し続けてきた。それを媒介に地域社会と関わり続けてきた。そのかたわら、元祖コミュニティ・ツーリズムであると指摘する研究者もいる「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」を 2004 年より実施し、貴重な経験を重ねている。

（２）コミュニティ・アートの手法の特長

手法を先に論じる方がコミュニティ・アートへの理解は早いだろうと考えるので、先ず述べる。

（なお、ここでは、上田、雨森、及び松村委員、水内委員の 4 氏が第 10 回座談会に提出した各資料にある表現をそのまま引き継ぐ）

○場を開く。コミュニティの中に拠点を設ける。

○地域へ出前をする（アウトリーチ）。まちに出る。

○場所・人・記憶（歴史）と関わる。

○地域に根差した作品・活動を産み出す。

○地元へフィールドバッグをする。

○地域の潜在的資源を再発見する。

○ささやかな表現の機会をつくり続ける。

○節々でまとめを発表する。

○外（他地域）へ発信する。ネガティブなイメージをポジティブに変換する。

このように、コミュニティに対して能動的に働きかけ、相互支援をしあうことを目指している。

（３）まちづくりへの貢献（機能や役割）

○機能や役割、及び地域との関係論にこそ、その考え方がくっきり浮かび上がる。

コミュニティ・アートは具体的な社会的包摂の手法を持っているとも言える。

○つなぐ。

さまざまなものをつなぐことができる。人と人をつなぐ。世代を超えてつなぐ。内と外をつなぐ。そうした媒体としての役割を果たすことができる。

○表現しあうことで、知り合いが、仲間が、友達ができる。

一匹狼的な人、孤独な人、コミュニケーションが下手な人が多いのがこの街の特徴とも言われているので、うまくはまれば効果は大きい。

例：夏祭りや越冬活動現場での習字大会。たった一言の言葉を自分なりに書くだけだが、その言葉から会話が生まれている。

○新しい人や考え方、価値に出会う。

表現の場ではこれまでの関係性とは異なった人に出会える。固定化された関係が変化することもある。新しい考えに出会うことによって、新しい価値に出会う。人生に幅が出てくる。

○考える。

常識やルールにしばられない表現に触れることで、考える機会が増える。おしゃべりの機会が増え、いろんな意見をきくことで自分の考えを深めることもできる。こうした一連のことが共生のまちづくりへの下地となる。

○自己肯定力を高め、回復する。

抑圧された生き方をせざるを得なかった人は自己肯定力が低い傾向にあるが、表現をとおして、承認され受けとめられる経験を重ねることで、自己肯定力が高まる。自傷や攻撃性が低くなり、傷ついた心を回復していく。

○表現を受けとめる力を高める。

他者から発せられた言葉や思いを、深く受け止めることができるようになる。売り言葉に買い言葉といった喧嘩よりも、いろんな受け止め方を学ぶ。

○仕事が生まれる。

得意なことを生かして、自分の役割を発見し、小さな仕事がうまれる。

○前向きの行き方に変わる。

○芸術と社会の生きた関係をつくることができる。わかりやすい言葉でいえば「地域密着型」。これによって、アートの側も救われる。社会化を図れる。アートのすそ野を拡大できる（表現の場、鑑賞者の開拓）

○地域資源の再発見につながる。

アーティストが見つけるのは、日頃そこに暮らす人には見つけられない地域資源でもある。

表現の機会をとおしてそういった資源を案内したり、可視化することができる。

たとえば、地域のおっちゃんたちが地域ガイドとなって街を案内し、トピックを地図に落とし込んでいく（カマップ）。道端の小さな花壇や路地の名所などが発見されている。

○可能性と同時に、課題の発見もできる。

○しかし、一方で「ほんまもん」のプロの技との触れ合いも必要。そのことが人々の向上心を刺激し、興味を持続させ、すそ野のレベルを引き上げる。スポーツもアートも芸能も同じ。メジャーのアーティストやプレーヤーもいないと、ほんものの振興になっていかない。

3. コミュニティ・ツーリズムと相互支援関係にすることが効果的

(1) コミュニティ・ツーリズムとは

一般的には、「観光客が訪れた地域の人々とふれあいながら、その地域の歴史や文化、生活を体験し学ぶという体験交流型観光」と定義されている（2008 年秋に発足した大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会の「設立趣旨」より）

ただし、あいりん地域の厳しい現実の中ではこのような悠長な定義ではおさまらない。釜ヶ崎のまち再生フォーラムの場合は、次のような経過と目的で始まった。

もともとそうであったが、特に 1999 年のフォーラム結成以来、地域事情に関する問い合わせがたびたび寄せられ、それに応えるため、実態としてスタディ・ツアーを何度も無料で実施した。その後、スタディ・ツアーの確実な需要と社会的意義がフォーラム内で認識されるようになり、2004 年 9 月から収益事業として位置付けられ今日に至っている。

スタディ・ツアーの目的は、以下の三つである。

- ① ホームレス問題や釜ヶ崎地域でのまちづくりについて現地訪問を受入れ、相互理解（学びあい）を深めること。
- ② それを通じて、市民社会と釜ヶ崎地域との架け橋になること。
- ③ 単身高齢者の生きがいと小さな仕事づくりに寄与すること。

いろいろな社会問題が凝縮して溢れるなか、新たなまちづくりが胎動する釜ヶ崎は、市民社会から異質で異様で危険な空間と認識され、立ち入り難いがゆえの好奇のまなざしと、内実理解に基づかない偏見のまなざしが投げかけられてきた。このツアーでは、地域の内実と市民社会の偏見とのギャップを埋め相互理解を図るべく、（野宿経験のある単身高齢の生活保護受給者など）コミュニティの成員が自らのコミュニティや人生を語り、収益の一部が当事者やコミュニティへと還元されている（炊き出しの支援団体や小規模 NPO の運営資金への寄付などもされている）。

(2) スタディ・ツアーから学べること

- さまざまなものをつなぐことができる。地域内の人と地域外の人。地域内の人と人。人と地域資源。学生等の若者と（今は紙芝居活動や人生の語り部をしている）元日雇い労働者のおじいさんたちを、世代を超えてつなぐ。そうした媒体としての役割を果たすことができる。
- 大学をはじめ教育機関と社会の生きた関係をつくることができる。
勉学へのモチベーションを高めることができる。
- 生きる力、人生や社会の奥行きを体感をもって学ぶことができる。
- おっちゃんたちをはじめ住民は案内人や語り部になることにより、自己肯定感を回復し、その力を高める。あいりん地域や西成区の良さを再発見し、この街で生きてきたことの肯定感→ふるさと意識の形成につながる。それはまちづくりに資する。
- おっちゃんたちは自分の役割を発見し、生きがいができる。語り部といってもむづかしいものではない。むしろ素朴な語りほど胸を打つ。これはもう明らかに表現活動である。

- 生活保護受給者と市民との相互理解がすすむ。
- あいりん地域や西成区での試み（問題解決へのチャレンジ）へのリスペクト（尊敬）がレポートにはよく書かれている。
- 地域資源の再発見をすることができる。「資源化されていない資源」の発見である。
- 課題の発見もできる。

4. 西成特区構想への提案

（１） 別途提案の『西成情報・アーカイブネット（館）』の役割の中に、コミュニティ・ツーリズムと抱き合わせでコミュニティ・アートの振興も組み込んで、ソフト部門全体の総合戦略を持つ。

＊西成情報・アーカイブネット（館）⇒第15章を参照されたい。

【理由】

- ①『西成情報・アーカイブネット（館）』でとりあげるコンテンツも、コミュニティ・ツーリズムもコミュニティ・アートも、西成区やあいりん地域という地域特性に根ざしている。地域資源の発掘・発見・創造・発信という、同じ作業である。
- ②実現のためのネック（課題）にも応えることができる。
 - ・文化的地域資源は単体単発でなく、集積した多様な総体として見せる必要がある。ものごとは大きく構えるほうがよい。一方で、きめこまかで、ていねいなアプローチも要る。その両立を可能にする。
 - ・誰がやるのか、主体が未熟なので、大きな網を広げたほうが人材は確保しやすい。
- ③このような大きな取り組みと個別の取り組みの組み合わせで若者を持続的に呼び込む。
 - ・大学等の誘致や芸大とのコラボも絡めば、もっと効果が期待される。

（２） そのうえで、個別論。

○クリエイティブ・シェア・センターを開設

- ・地域にクリエイティブ・シェア拠点（カフェ・居場所・作業所）を点在させ→それをネットワーク←そこを地域住民や外部者が訪問交流できるようにする。
- ・空き家や簡易宿泊所を活用したアーティストの住居＋交流拠点の創出
- ・創造活動拠点（新・福寿荘など）の延伸
- ・「トキワ荘」大阪ディープサウス版のようなものの模索も行なう。

○西成国際アートフェスティバルの開催と通年化をめざす。

- ・とりあえず、この11月には西成ライブ・エンターテインメント祭の開催を予定。

（３） コミュニティ・ツーリズムについては、生活保護受給者をはじめとする住民の中から解説者（インタープリター）や語り部を育成する。くり返すが、これは表現活動である。受け入れる地域住民の側も積極的に協力しあえるような関係やしくみづくりをする。